

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.246

ISSN 2432-5295

盛夏満腹

CONTENTS

- ◆【盛夏満腹】…01～04
- ◆今、こんな仕事をしています…05～08
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙

盛夏満腹

猛暑日の日数は年々増え続け、「危険な暑さ」という表現も頻繁に耳にするようになりました。本号が読者のお手元に届くのは暑い盛り、盛夏の時期でしょう。季節感を大切に？しているレターズアルパック。本号のテーマは四字熟語（風）の「盛夏満腹」としてみました。

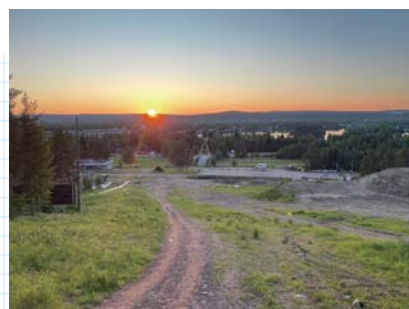
「盛夏」は食欲も減退する時期で「満腹」とは結びつきにくい（熟合度が低い）ので、この語が他で使われている例はほばないことでしょう。このテーマでものごとを考えたことのある人もほばいないはずですから、文章を書くのも簡単なことではないです。しかし、どんなシチュエーションにも対応するのが私たちの職能のひとつ。自由に発想を広げてもらうことを期待して寄稿を依頼しました。さて、各人の苦勞の跡をお楽しみいただけますでしょうか。

レターズアルパック編集委員会

夏の喜び

新開夏織：

建築プランニング・デザイングループ



深夜0時の太陽

じめじめとした日が続き、梅雨明けが待ち遠しい今日この頃。ここで、夏の訪れをひときり待ち望む、フィンランドの夏至祭についてご紹介します。

フィンランドの夏至祭は、北欧の短い夏の訪れを祝う特別なお祭りです。一年で最も大切な祝日の一つです。

北欧諸国では年間を通して暗く寒い日が続きますが、夏になると太陽が沈まない白夜が訪れます。その象徴ともいえるのが、6月下旬の夏至の日です。この日は一年で最も日が長く、フィンランドの人々にとって特別な意味を持っています。

北極圏にあり、冬にはオーロラやウインタースポーツなどで多くの観光客が訪れるロヴァニエミの町では、川のほとりにある広場に多くの人々が集い、夏至の日をお祝いします。夏至祭では、民族衣装に身を包み、花冠をかぶった女性たちが伝統的なダンスを踊ったり、ステージで歌や演奏を披露したり、地元の人たちがお店を出したりし、人々を楽しませます。

そして夜には、大きなかがり火が焚かれます。このかがり火

は、古くから悪霊を追い払い、豊作を願うための儀式として行われてきたものです。まだ明るい夜8時に火がともされ、大きく燃え盛る炎を多くの人が見守る様子は、自然の厳しさと恩恵をよく知るフィンランドの人々の心を映し出すかのような、とても神秘的なものを感じます。

夏至を過ぎると、フィンランドの森ではラズベリーやブルーベリーなどの大豊作が訪れます。フィンランドでは自然享受権というものがあり、国や個人等、誰の所有の森に関わらず、誰でも自由に散策し、ベリーやキノコを摘むことができます。そのため、現在でも多くの人が森に足を運び、ジャムやタルトにして楽しんでいるそうです。

日本の夏もまた、暑さが厳しいものですが、夏だからこそ楽しめる冷たい食べ物や楽しいイベントは、私たちの心を豊かにしてくれます。これから訪れる夏の恵みを最大限に生かし、心もお腹も満たされるひとときを過ごせることを願っています。



点火を待つかがり火

夏の暮らしを豊かに

城本大暉：
都市・地域プランニンググループ



川西市多田グリーンハイツの商店街

本格的な夏が到来する中、私は日々の業務に励みつつ、心を満たす方法を見つけてることを大切にしています。

学生時代は不健康な生活をしていたのですが、最近は健康意識が高まり、毎朝少し早起きをして近くの公園を散歩することを習慣にしております。朝の澄んだ空気のなかで歩くと、清々しい気持ちで一日を迎えることができます。特に、緑豊かな公園の中で聞こえる鳥のさえずりや、風に揺れる木々の音は、心を落ち着かせてくれます。

仕事の面では、暑さに負けずに快適に過ごすための工夫をしています。オフィス内では冷房が効いていますが、外回りの仕事もあります。その際には、帽子を着用して直射日光を避けるようにしたり、冷感素材のタオルや冷却スプレーを使用して体を冷やしたりしています。また、オフィス内では、冷房の効きすぎに対処するため、長袖の服装を選ぶようにしています。冷房で体が冷えすぎないように、服装で体温調節をして、冷房が効いている室内でも快適に過ごすことができます。

私生活の面では、週末に街の新たな一面を探しに出かけることが私の心を満たしてくれる楽しみの一つになっています。普段はオフィスと自宅を最短距離で往復していますが、いつもは通らない道や知らない街を歩いてみると、新しい発見がたくさんあります。「こんな細い路地に新しいカフェができて」「この駄菓子屋、まだあったんだなあ」などと、普段なら見逃してしまう発見をすると嬉しくなります。また、私の地元商店街は、平日の夕方から夜の時間帯に地元学生のたまり場となります。にぎやかな雰囲気になります。商店街名物のイカ焼きやハムカツを食べて懐かしい景色の中を歩いていると、子どもの頃に帰ったようで胸が踊ります。

このようにして私は、暑さの厳しい夏を自分なりに回避したり楽しんだりして、お腹も心も満たしております。朝の公園散歩、仕事上の工夫、週末の街歩き。それぞれが、私の夏を豊かにし、暑さを乗り切る力になっております。これからも、心と体のバランスを取りながら毎日過ごしていきたい、さらに今夏はあたらしいことにも挑戦したいです。新人社員らしくフレッシュな夏を迎えたいと思います。

いつも酷暑にスパイスを。

廣部出：
公共マネジメントグループ

初めて聞く（そりゃそうだ）四字熟語なので、生成AIにこりゃなんだと尋ねたところ、「盛夏満腹」は、直訳すると「夏の盛りに腹いっぱい」となるそうです。執筆時点で昨年以上の酷暑が予想されている中、さてこの夏、どんな食生活をアゲテコーカというお題ですね。ナマ寄りのステーキ肉を胃袋に叩き込んでの麦酒か、はたまた馴染みの蕎麦屋で昼酒一献か。先日、芽葱の握りをいただきましたが、薬味として食べるより風味鮮烈で旨くて冷酒に合う……って、これはY・GTPが生成される話。

さて、尋ね方を変えてみたら「夏の豊かさを心ゆくまで楽しむこと」だそうです。人生のスパイスともいわれる、一晩中、電気ウキを眺める釣查のことです。現場まで車で片道2時間かかる出釣ですので、日が長い夏場は朝までの夜勤です。潮があつちに動いたり止まったりそつちに動いたり、海風と陸風が入れ替わったり、そんな変化の境目で海霧が立ち昇って沖から静かに迫ってきたり。日の出が近づくと生まれ変わった潮がざわつき始めて、一晩ご一緒に地元釣查員のみなさんは、朝マヅメの青物狙い。始発を待つてまた2時間かけて帰る

私は「ほな帰りますわー、おきばりやすー」と告げ、本日の漁獲をどないして食ってやろうかと考えながら、そつと現場を後にします。もうすでに食欲はアガっているのです。

そうそう、スパイスやなんやの話です。まず思いつくのは、時々ランチで邪魔魔するカレー屋さん。ドライカレーとかオーダーしたら、夏の豊かなスパイスの香りを心ゆくまで楽しんで、食欲不振ときは吹っ飛びます。気まぐれメニューのポークヴィンダルの酸味もたまらなくて、きつとなんか効いてるはず。すっぱからいタイのサラダもむしゃむしゃやりたい。がつつり花椒にシじりたい。一味醤油は天肉に、柚子胡椒は鶏肉に。たとえ釣查結果が芳しくなかったとしても、こんだけ刺激的なものを食べてたら、夏バテはきつと大丈夫。



天肉の液です



お好みの「あいがけ」もできます

川で涼む

丸山泰誠：
地域再生デザイングループ

梅雨が終わり本格的な夏になりました。世界的にも気温が上昇しており、サウジアラビアでは気温が50度を超えて1300人の死者がでるニュースがありました。今回のテーマである「盛夏満腹」ですが、暑さと満腹をつなげるテーマであり、私の趣味から連想しました。

私の家はマンション最上階の3階4階にあたるメゾネットです、日光が直接あたるので室内は40度近くになります。寝室は4階でエアコンは3階部分にあるので冷たい空気は寝室にあがらず、寝るときには汗が止まらないストレスフルな環境で寝ています。そんな私のストレス発散できる趣味は、休日にサウナに入って、ラーメンで腹を満たして寝ることです。最近では近所の王将のメニューにある次郎系焼きそばがおすすめです、野菜と油をマシマシで注文して物理的にも精神的にも自分を満たしています。

話は変わりますが、私は大学院時代には滋賀県長浜市の中心市街地を流れる米川にて、かわまちづくりに関わっていたことにより、「水辺・河川」に関するワードを聞くと涼しさを連想でき、少しテンションがあがります。米川は伊吹山を水源とする

る姉川から川幅がおよそ5メートルの細い川です。昔から地域住民との歴史や関わりがある川であり、いくつかの住宅には屋内から直接川に降りることができ、階段や、飲食店では採ってきた魚を川とつながっている生け簀に保存する文化があります。このような川との関りがある一方で、戦後には使い古したお茶碗や割れてしまった陶器やガラスなどを川に投げ捨てる文化もあり、生活と密着していたことがわかります。

長浜市でのかわまちづくりの内容は、中心市街地の商店街近くに流れる米川を歩いて楽しいウォークアブルな川にする取組です。町中にある公民館を利用し、小学生を対象にした生き物キャンプの企画や川を歩く研修会のスタッフを担当しました。課題としては、川は安全に誰でも入っていいという周知すること、頻発する河川の氾濫に対する解決方法があげられています。特に河川の氾濫に対する解決策として、京都市内にある雨庭という水をゆつくりと地下に浸透させるという考え方を応用して、現在では流域内にあるコンクリートの駐車場を芝生に変えてみる取組を行っています。

『ミッドサマー』

藤田太裕：
都市再生・マネジメントグループ



盛夏といえば、暑さのピークが連想されます。なんとなくダルそうな夏バテのイメージもわきます。

ちなみに、夏バテで食欲が落ちるのは、食物を摂取すると消化・吸収のために体温が上がる人間の身体は、気温が高い状況だと体内の熱の発生を抑えるために満腹中枢が刺激されて食欲を低下させるのが原因とされているそうです。加熱して料理を作ると室温が上がリ、これもまた食に意識が向かない理由になりますね。夏は、まずは涼を求めなくては、食はままなりませぬ。

今年のアルパックの新人歓迎会は、梅田駅の近くの地下一階のビアホール（ニュートキョー 第一生命ビル店）で開催されましたが、実は屋上ビアガーデン発祥の地でした。地下一階なのに、屋上？と思います。地下が、会場に参加者が入りきらず、ビルの屋上も会場としてビールや料理を振舞ったというのが経緯だそうです。屋上ビアガーデンは、冷房用エアコンの普及の前に最盛期を迎えたそうなので、一つの文化の興隆も、涼あがりき、涼あってこそその食事なのです。

暑さといえば、注意すべきは熱中症です。熱中症による救急搬送人員は毎年数万人を超え、死亡者数は5年移動平均で1000人を超える高い水準で推移しています。世界的にも、イスラム教の聖地メッカへの「大巡礼（ハッジ）」での熱中症の死者数が日ごとに倍増していくニュースが流れています。

そんな情勢下で、今年から、改正された気候変動適応法が施行され、熱中症警戒アラートが、熱中症警戒情報として法に位置づけられ、一段上に熱中症特別警戒情報が新しくできました。

また、熱中症特別警戒情報の発表期間中には、市町村長が冷房設備を有する等の要件を満たす施設（公民館、図書館、ショッピングセンター等）を指定暑熱避難施設（クーリングシェルター）として指定し、一般開放するようになります。台風・地震などの災害時の避難所の、暑さ版みたいなものですね。外出の前に、道中どこで涼めるのか事前に調べる習慣も必要です。

「夏ノ暑サニモマケヌ丈夫ナカラダヲモチ」たいと思うところではありますが、この夏の暑さに適応して、常に涼を求め、夏を乗り越えていきましよう。

盛夏満腹計画

豊福宏光：

地域産業イノベーショングループ

私が本格的な「夏」を感じるのは、モクモクした雲の形と空の青の色を見たときです。そこから夏の始まりを感じますが、盛夏満腹というテーマで、お腹や心を満たしたことを考えてみました。が近年いやここの数年環境の変化等から夏を楽しむことができていなかったとこの記事を書きながら気づきました。

日常生活で「食を楽しむ」については、夏の定番の京都の夏野菜はじめ、とうもろこしやナス、枝豆等をお店と自宅両方で味わいたい。「居心地の良い空間に身を置く」については、自宅で過ごす場所や出張先を含む仕事をする場所、休みを過ごす場所など、可能な限り自分が良いと感じる空間を探し、自分が満腹になれる空間を沢山持つこと。「自分の感覚をしっかりと認識する」については、日常生活の中で自分の気持ちに耳を傾け認識した後に判断し行動する。

その中で、自然（意識はしているが無理をしすぎない）と仕事の広がりや深化につながって、いけば良いと考えています。まずは、自分自身を満たす（盛夏満腹）夏にしたいと思っています。

最後に、これまで盛夏満腹の計画を示しましたが、これまでの生活してきた中で私が一番好きな夏の過ごし方は、夏の休日に雨が降り、雨を理由に一日中家から出ないことです。



夏は満腹の季節

佐土井達也：

サステナビリティマネジメントグループ

満腹の記憶を思い起こしてみると、夏の多いような気がします。夏は旅行によい季節で、旅行とまでいかずとも外に向かつて動き出す季節だと思えます。私にとって満腹というのは、その過程も含めて満ち足りること、例えば初めて青春18きっぷを使つて1日中列車に乗り続けた日にわずかな接続の間を使つて駅そばをすつた体験であり、ママチャリで琵琶湖を一周したときに湖北の飲食店を空白地帯を抜けてようやく見つけた近江ちゃんぽんの店で腹を満たした体験なのですが、その多くが夏を活かして飛び出した旅の記憶の一部として思い出されます。

旅先で見知らぬ料理、見知らぬ食材に出くわすことは、見知らぬ場所にひとりどことなくそぞろな気分とあいまって、格別の満腹体験を与えてくれます。いつどこに転がっているかわからないこのような体験を逃さないよう、旅先では常にコンディションを整える、極力一つのところで食事をとりすぎない、土地の名産や旬の情報を常に頭に入れておく、急な発見に対応できるような時間に余裕を持つて動く等を心がけています。

最近では、昨年夏の勢いを活かして初の海外旅行として釜山に一人旅に行きました。韓国では「ご飯食べた？」というあいさつがあったり、おいしい店なら必ずチェーンになるからチェーンになってない店にはいかない方がいい、という言葉があるほど食に貪欲です。実際に海外に行かずとも、新しい言語を学んでその言語圏で語られる食文化等についての見聞を得ることは、ある種の満腹体験を感じさせてくれるため、コロナ禍以前から韓国語を学習していました。今はアラビア語を学習しています。

働き始めてから落ちた運動量を戻して体力を、新しい言語を学習し続けて学習体力を、残りの人生でもできるだけ多くの満腹体験との出会いを求めて冒険できるよう維持していきたいと思っています。



初の海外旅行で行った韓国・釜山で初の食事となったカルグクス。間違えて8000ウォンのところ800ウォンを支払い怪訝な顔をされた。

能登半島地震からの復興に向けて

嶋崎雅嘉：
生活デザイングループ

今年の元日に能登半島地震が発生し、石川県、富山県、新潟県などにおいては、甚大な被害を受けました。

アルパックでは、能登半島の南部エリア及び富山県を中心とした住まいの復興に向けた調査業務を国土交通省から受託し、現在、石川県内灘町、富山県氷見市などで今後の住宅に関する復興検討などのお手伝いをしています。

内灘町、氷見市とも、液状化現象による被害が大きい地域であり、地盤の不等沈下や側方流動により、建物の倒壊、傾斜等の被害が多く発生している地域です。

氷見市においては、現在、災害公営住宅の供給に向けて、具体的な敷地選定が行われ、どのように災害公営住宅を建設するのか検討がはじまっています。



内灘町においては、側方流動（※）により数メートルも地盤がずれるとともに、隆起や沈降が発生しており、想像を超える被害状況が広がっています。まずは宅地の復旧や液状化対策の実施に向けた検討が別途進められているところであり、並行して住まいの復興に向けた検討を進めているところです。

地震発生から既に半年が経過しています。復興に向けた歩みはその遅れが指摘されている中ですが、両市町とも被災した建物の公費解体が徐々に進んできており、少しずつ進捗が見えてきています。

能登半島地震における犠牲者は、災害関連死の方を含めて280人（令和6年6月現在）を超えています。一日でも早い復興を進めることで、被災者の方々の安寧をとり戻すことが重要です。

我々も「住まいの復興」が早く進むことを目指して業務に取り組み、被災者の方々の健康やコミュニティを維持し、安心して暮らすことのできる住環境が確保される提案をしていきたいと思っています。※側方流動…地震時に発生する液状化に伴い、地盤が水平方向に移動する現象

中山間地域の集落の存続に向けたお手伝い

高野山麓に位置する農村集落の自主的・主体的な地域づくり

藤田始史
ソーシャル・イノベティブデザイングループ

ソーシャル・イノベティブデザイングループでは、都市計画にとどまらず、さまざまな幅広い分野の仕事に関わっています。

中山間地域での地域づくり支援もその一つです。人口減少が都心部よりも顕著に進む中山間地域においては、公共交通サービス機能の低下や、生活サービス機能の低下などが進行するとともに、地域活動の担い手不足などの問題が顕在化しています。昨年度からそのような中山間地域である、和歌山県かつらぎ町志賀地区の地域づくり支援に地域づくりアドバイザーとして関わらせていただいています。

志賀地区は高野山麓に位置し、昔から高野山の参詣道として栄えた地区で、後醍醐天皇から刀剣を賜ったと伝えられるなど古くからの歴史がある集落です。現在でも田畑が広がり、茅葺の建物が点在し、梅雨時には蛭が飛び回るなど、昔から変わらない景観が残っています。また、高野山の影響を受けた風習や文化も維持されています。しかし、全国のような中山間地域同様に高齢化や人口流出が続く、集落の存続が危ぶまれています。その危機感から、住民の有志で「灯りの里」志賀寄合会」を立ち上げ、集落の存続に

向けて話し合いを続けてきました。今回の私どもの仕事は、この寄合会とともに「集落の将来のありたい姿（目標）」、「まちづくりの方針（戦略）」、「そのためにすること（戦術）」を考え、実際に動き出せるように支援していくことになりました。

1年間の話し合いの結果、地域の連携を高める「大人食堂」や、大学生と連携した「SNSを活用した魅力発信」などの企画が進んでいきそうです。

近年、「無住集落」、「村おさめ」など、集落の活性化や維持以外の選択肢も検討しなければいけない状況になってきました。どのような選択肢を選ぶのか。大切なことは、「集落の方が話し合い、自分たちで選択すること」です。集落の方の伴走支援として、お役に立てればと思います。



志賀地区の風景

いざという時に役立つ、退避施設開設・運営マニュアルを作成しました

福井秀樹：

都市・地域プランニンググループ

大規模地震が発生すると、名古屋駅周辺地区等の地域において、多くの帰宅困難者が発生し、大きな混乱を招くことが懸念されています。

このため、名古屋市中では官民が連携し、帰宅困難者を受け入れる退避施設の確保等の対策を進めています。退避施設では、発災時に帰宅困難者を受け入れるため、建物の安全点検、受入スペースの設営、受付、物資配付など、開設・運営に係る業務を施設管理者が行うこととなっていますが、現状では、それぞれの施設において、開設・運営に関するマニュアルの作成が進んでいないという課題があります。この業務は、退避施設の円滑な開設・運営を支援するために、汎用的な開設・運営マニュアルを作成したものです。

今回作成した開設・運営マニュアルには次のような特徴があります。

特徴1…従来のマニュアルでは、平常時の備えとして、発災時に運営体制を取り決めておくことなどが手順として示されています。しかし、小規模な退避施設などにおいては、発災時に体制が組めないことも想定されます。取り決め前に発災することもあるでしょう。このような

ことから、今回のマニュアルにおいては、「何も準備していないくても、誰もが退避施設を開設・運営できるマニュアル」をめざして作成しました。発災時に巻頭から読み進めれば、準備していかなくても退避施設を開設・運営できるようにしています。また、運営時に必要となる各種の案内掲示についても、市から退避施設に配布する「開設キット」に予め格納しておきました。

特徴2…名古屋市中では、携帯端末を使用して退避施設に関する情報を入手したり、災害対策本部とのやりとりが可能となる「帰宅困難者対策情報共有システム」を運用しています。マニュアルでは、どのタイミングでどのような情報をシステムより入手、あるいは市へ報告するのかを順を追って示しています。これによって、退避施設と災害対策本部の連携が強化され、作業の軽減が図られるとともに、帰宅困難者への情報提供もスムーズに行うことができるようになっていきます。



まちあるき調査を通して赤塚らしい景観のあり方を考えました！

筈谷友紀子：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

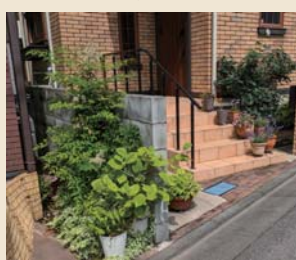
令和5年から赤塚四・五丁目地区の景観の魅力について地域のみなさんに楽しみながら知ってもらおう「フムフムあかつかProject」を進めています。

6月15日に開催した第4回「フムフムあかつかProject」では、色彩やみどりの配置についてのルールを検討するために専門家をお招きし、参加者自ら調査員となって地区内の色彩やみどりを調査するまちあるきを実施しました。

私が担当したみどりコースでは法政大学法学部教授の杉崎和久先生を講師に、まちなかにある小さなみどりである「まちなか園芸」を見つけて愛でるまちあるき調査を行いました。

実際に歩いて見ると、地域では駐車場やガレージをつかったまちなか園芸がよく見られました。おそらく自動車を手放した高齢者の方が趣味として育てているのでしょう。高齢者の方が生きがいや趣味として「まちな

● 通り際の小さなスペースで園芸を楽しむ（まちなか園芸！）



収集したまちなか園芸技術をもとに、地区で実践したいまちなか園芸やその効果について話し合いを行いました。

（上）調査カード

（左）調査カードに記入された「駐車場のまちなか園芸」

か園芸」を楽しみ、それが結果的に（意図せずとも）まちの景観に彩りを与えているのです。景観を良くしようと取り組むにはエネルギーがいりますが、楽しいこと・日々の何気ない営みを景観づくりのきっかけとしてとらえ、より良い方向に行くように少しでも工夫する、そういった仕掛けやデザインが景観まちづくりには必要なのでしょう。

暮らしをかたちづくる広場づくりにむけて



3月のイベントでお披露目した広場のコンセプトを具体化していきます

羽田拓也：

都市再生・マネジメントグループ

やってみたいことの実現を通して「長池での暮らし」の幅を広げる、イベント広場で終わらない広場づくりにチャレンジしています。

昨年度、「長池のここ、みんな使ってみませんか」と題して、城陽市のJR長池駅前にある公用地活用を検討するワークショップを行いました。ワークショップでは、参加者の皆さんそれぞれが、「駅前のこの場所に広場ができたら」をイメージして、自らがやってみたいことを思い描き、広場ができたら大切にしたいコンセプトをまとめました。

今年度は、整備前の状態ながら、「やってみたいこと」を具

際にやってみることを通して、昨年度検討した広場のコンセプトやありようを深め、将来の整備につなげていく予定です。

こういう投げかけをすると、どうしても「イベント的」活用をやってみることに意識が行きがちですが、広場は完成すれば、24時間365日そこにあることになります。

「知り合いに会うと思って広場に寄って帰る散歩コースに変えてみた」とか「孫と遊ぶために外に出かけるようになった」とか「学校帰りに友だちとリアルでおしゃべりする時間が増えた」とか「習い事の発表イベントを企画してやってみることにした」とか……「広場が身近にあること」が日常の自分たちの暮らしや地域のなかでどういった位置を占め、どういった役割を果たすのか。昨年度の意見交換も踏まえ、長池の皆さんとともに実際に使いながら考えていけたらと思っています。

ちなみに、芋ようかんをお茶請けにお茶か梅酒をいただくというのが私の「長池でやってみたいこと」のひとつです。おいしいお菓子とお茶（お酒）が好きな方は一緒にぜひ。

台湾最大級のスタートアップ支援施設「t.Hub」

貴船律子：

地域産業イノベーショングループ

レタース242号で紹介した先進的イノベーション拠点の「STATION F」（フランス・パリ）に続き、台北市に開設された「t.Hub」（26000平方メートル）にヒアリングを行いましたのでご紹介します。

半導体産業が急成長を遂げている台湾ですが、t.Hubは2020年8月、台北市東部の内湖科技園區（ソフトウェア企業や電子産業が多数立地するサイエンスパーク）に開設されました。市内中心部からMRTで30分、松山空港からは15分とアクセスに恵まれています。

台北市が底地を提供、大手ダイベロップの宏匯瑞光股份有限公司がPMで開発・建設スタートアップ支援施設は財団法人工業技術研究院（ITRI）が運営しています。

特徴の一つは、三棟からなる建物の一つはLINE本社が入っており、集積のブランド化が構築されていることです。

次に、t.Hubのスタートアップ支援施設は、コワーキングスペース、試作室と入居スペースからなり、AI+IoT、ビッグデータ、クラウドサービス、教育等、261社（令和5年12月現在）が入居し、稼働率は概ね100パーセントに達しています。スタートアップ支援として、海外の展示会への出展や海外のパートナーとの連携を支援している

ITRIは、日本の独立行政法人産業技術総合研究所のような機関ですが、技術研究・開発に加えて、ビジネス支援機能を強化しており、t.Hubもマーケティング等を専門とするスタッフが活躍している点です。

三点目は、エコシステムがデザイン化されている点です。VC等のビジネスネットワークに加えて、台北広域圏には新設のビジネスコミュニティが重層的に存在し、キーストンの組織・人物が存在し、ネットワークが構築されています。

訪問時に開催されていたピッチを見学させてもらいましたが、英語でのデモも少なくなく、出会ったスタートアップの多くから、ビジネスへの熱量と台湾から世界市場を目指す気概がひしひしと伝わってきました。

※本文に記載した情報はヒアリングを基に作成しています。



官民連携により整備されたイノベーション拠点
（出典：t.Hub からの提供資料）

森に還り次世代を潤す墓地

竹内和巳：

生活デザイングループ

**世帯構成や価値観の変化により
樹木葬墓地が選択されるようになって
います**

昨年度、神戸市より、樹木葬墓地の検討を行うための基礎調査を受託しました。民間ホームページによると、新規でお墓を購入される方は、すでに一般墓よりも樹木葬をはじめとした合葬墓を選択される方が多いとのこと。核家族化・単身化などの世帯構成の変化や価値観の変化が影響していると考えられます。

日本はすでに多死社会を迎えています。今後、団塊の世代の死亡も控えていることから、死亡数及び改葬数はより一層増加すると考えられ、合葬墓はより一層需要が高まると考えられます。

その中でも、樹木葬型の合葬墓は自然志向型の方が選ぶ傾向もあります。樹木葬墓地について研究されている学識者にヒアリングしたところ、海外には次世代のグリーンインフラとして貢献する意識から樹木葬がトレンドとなっている国もあるそうです。

先進的な事例として、ドイツのオールスドルフ墓地を教えてくださいました。魅力ある空間

として整備されている空間は、墓地需要に応じて公園と墓地のバランスが変わるようになっており、公園墓地利用のプロジェクトが住民参加で進められています。例えば、墓地のなかでヨガ教室が行われるなど、生きている人と亡くなった人の共存が図られているとのことでした。

日本などの祖先崇拜の習俗がある国では、墓地は容易に改廃できない施設と言えます。一方、都市部で新規に墓地・墓苑を整備することは容易でない中、墓地を都市のインフラとして持続的に運用する視点は重要であり、公園と墓地の一体運営は有効です。公園墓地が当たり前になる、そんな時代がやってくるかもしれません。



大阪府での脱炭素につながる お買い物の取組が3年目を迎えました

齋藤友宣：

サステナビリティマネジメントグループ

脱炭素を目指し、社会全体でCO₂削減に取り組まなければならないことから、省エネやエコドライブなどわかりやすいものは既に多くの方が取り組まれていると思います。

でもそれ以外でどうすればよいか、なかなか悩ましいと感じている方も多いのではないのでしょうか。

そんな中、アルパックでは令和4（2022）年度から大阪府が行う脱炭素につながる商品やサービスを利用した府民に普段のお買い物に使えるポイントが付与すること、消費者の意識と行動の変化を促す「おおさかCO₂（コツコツ）ポイント+」の取組の事務局を担っています。3年目にあたる令和4（2022）年度は、府内の約20事業者の参加を目指し、第1次募集では、14事業者が採択されました。

私たちが毎日利用する商品やサービスは、同じように見えるものでも使う材料や作り方・運び方、商品の性能等によって、CO₂排出量に違いがあります。例えば、

地元農産物は輸送距離が短いので、燃料消費によるCO₂を削減できますし、詰め替え商品の購入や持参容器への量り売りは使用容器を減らせるので、容器製造時のCO₂を削減できます。自分たちが日々買い物をしたり、サービスを選んだりするときに、少しでもCO₂排出量が少ないものを選択すれば脱炭素に貢献することができます。

大阪府内にお住まいの方や勤め等されている方は、今年度参加事業者のお店で、図の啓発ちらしにあるような亀のマークを探してみてください。また「おおさかCO₂ポイント+ホームページ」に参加事業者の店舗や対象商品サービス、ポイントがもらえる期間をまとめているので、チェックしてみてください。
<https://osakaco2.jp/>





第26回(2023年)まちづくり・都市デザイン競技で まちづくり・都市デザイン競技審査委員会賞を受賞!

筈谷友紀子:

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

茨城県土浦市の「土浦駅前通り周辺地区」を対象に、「ポスト・シュリンキングシティにおけるインフラ空間のり・デザイン～インフラストックを活用した重層的な土浦カルチャーの創造と継承～」と題して提案を行いました。

今回、都市の拡大・縮小という動きに伴いインフラ

の役割が異なった結果、「ズレ」が生じその隙間から生まれつつある土浦のサブカルチャーに着目しました。提案としては「隙間」を生み出すデザインとサブカルチャーの誘発の仕組みのデザインです。

提案内容については以下のQRコードからご覧いただけます。



UDC
ホームページ



パネル
(PDF/1枚目)



パネル
(PDF/2枚目)



アルパック物故者追悼会、OB・OG交流会を開催

杉原五郎:

実行委員長(相談役)

5月25日(土)、アルパック物故者^{ついで}の追悼会を天性寺(寺町三条上る)にて執り行い、アルパックOB・OGとの交流会を、ホテルオークラ(河原町御池)で開催しました。全体で50名ほどの参加でした。

アルパックは、1967年に創業し、今日まで57年余り都市計画とまちづくりに取り組み、国や自治体の関係者、地域の諸団体、市民の方々のご支援、ご指導を得て今日に至りました。都市や地域に係る業務を通じて地域社会の発展と企業としての成長に努めてきました。このたびの追悼会は、アルパックとかかわりのあった皆様のご努力に感謝し、物故者を追悼することを目的に開催しました。中塚一社長が弔辞を述べ、三輪泰司名誉会長がまとめの挨拶をしました。交流会は、食事とアルコールを交えて、和やかな交流と懇親を進めました。OB・OGの方々は、久しぶりの再会を喜び、アルパックの社員も歓談と交流の輪に入り、交流会を楽しみました。

1974年に入社した私は、京都事務所で一緒に仕事をさせていただいた、西村昌子、稲石勝之、松村久美

秋、松島茂木、遠藤聡、大阪事務所時代の糸乗貞喜(事務所長)、藤原宜昭、堅田喜博、森脇宏(前社長)の各位を偲ぶ機会となりました。アルパックを退社して新たな環境の下で仕事をされている、池田毅、林孝昌、岡本祥浩、澤田英郎の方々と親しくお話をすることができました。たのしいひと時でした。

追悼会、交流会を通じて、有意義な取組みになったのではとの感想を持ちました。



近況 & イベントのお知らせ

事務所だより

九州

山笠は始まっている

九州事務所 福吉聡子

博多の夏は祇園山笠です（諸説あると思いますが）。毎年7月1日より飾り山笠が公開されるので、7月に始まるものと思われませんが、すでに棒洗い、棒締め、小屋入りなどの準備が始まっています。クライマックスである7月15日早朝の追い山笠まで行事が続きます。

博多祇園山笠の起源には諸説ありますが一般的なのは、聖一国師が仁治2（1241）年、疫病退散のため施餓鬼棚に乗って祈祷水をまいたのが始まりというもの。以来782年の伝統を持つ、博多総鎮守の櫛田神社に奉納される神事です。追い山笠では、男たちに担がれた重量約1トンの山笠が櫛田神社をスタートして廻り止めにゴールするまでの約5.5kmのタイムを競います。その関連行事で7月は交通規制等もありますし、14日夜のホテルは不足気味に…。福岡に来る方はご注意ください。



飾り山笠（写真提供：福岡市）

京都

まちなかのお祭り

京都事務所 豊福宏光

皆様ご存じの通り、京都では7月1日から祇園祭が行われています。

昨年10月に引っ越しをした京都事務所を一步出

と四条通は提灯が飾られ、帰宅時には二階囃子（お囃子の練習）が每晚行われており、身近に日本の夏を感じることができます。

私は京都に引っ越してまだ1年強ですので、とても新鮮で仕事帰りは街中をぶらぶらしています。今年も気温が高く暑いですが、囃子の音やその音で立ち止まる人、提灯の明かり等が暑さを緩和しているのか、暑さが祭りの雰囲気盛り上げているのかよくわかりませんが、まちなかに身を置いていることが心地良いと感じます。昨年は引っ越ししたばかりで祭りを楽しみ余裕がなかったですが、今年は祇園祭と共に夏を楽しみたいと思います。



アルパック・パーソナル・ヒストリー・アーカイブプロジェクト リレーセッション 第3回 道家駿太郎

倉見祐子

第3回目にお越しいただいた道家駿太郎さんは、アルパック創業期から建築計画・設計を担われ、そして今もOB・OG会の会長としてご尽力いただいている、まさにアルパックの“礎”といえる存在です。ご自身が手掛けた業務のみならず、アルパックのエボックとなった様々な業務や人物について、ついこの間の出来事のようにいきいきと、生々しくお話いただきました。アルパックとは「何者」で「これから何を目指していくべきか」についても示唆をいただき、私のような社歴の浅い人間にとっても大変学びの多い時間となりました。

道家さんは1969年に入社。まだ「株式会社」にもなっていない、所員総勢十数名程の頃です。天才・奇才が集まる東京藝大のご出身でありながら、なぜわざわざ西の都・京都の小さなアトリエに入ろうと思ったのでしょうか？そこにはやはり、20世紀の「住まい」をつくった建築家・西山卯三先生の思想への共鳴があったそうです。

当時の日本の「公営住宅」のあり方に疑問を持ち、

設計以前に政策面から考えないといけなと感じた道家さん。大学院を卒業後、西山先生の門下生であり、以前から交流のあった三輪さん・浅田さん・霜田さんが創業していたアルパックに入社の合意もないままに身を寄せ、平行定規1本を持参して設計スタッフとして「何でも描きますよ」と居座った(!)そうです。私にはとてもそんな度胸はありませんが、そんな熱意と活気をもったメンバーで満たされていたのが当時のアルパックだったのでしょう。その後、大阪万博や城崎温泉での実績へとつながったのはご存知の通りです。

「世界的なシンクタンク」「地域住民のためのコンサルタント」を目指し、京都から日本中、そして世界へと発信していくんだ！という創業当時の思いは今も変わらないつもりですが、道家さんからはこの頃の「レターズアルパック」を見て、アルパックがこれからどう次のステージにつなげていくのか、世界にどう広がっていくのか、展望や気迫を感じられないという苦言もいただきました。関西万博を目前に控え、改めてハチマキを締め直さねば！と感じた所員一同でした。



このようなことをして遊んでいる

三輪泰司
名誉会長ま
か
ど

平安宮&平安京を歩く

今年は、テレビのおかげで、平安宮

も平安京も賑やかです。NPO平安

京二十年のお話しです。

平安宮とともに

私が卒業した出水(現二条城北)小学校は、内裏の紫宸殿の跡あたりです。自宅は、上京区主税町でした。主税という民部省所属の役所跡です。「ウチは淑景舎の跡や。庭に桐の木がある」と言っていた子もいました。

光源氏の生母桐壺更衣は身分が低かったので、部屋は、清涼殿から一番遠い東北隅の淑景舎即ち桐壺だったのです。その「平安宮」を顕彰しようと出水・正親・聚楽学区に住まいする有志が集まってNPOをつくりました。最年長であったので会長になりました。2004年でした。事務局は中務省跡にある居酒屋「寿海」です。

平安京で遊ぶ

と言っても、人が住み続けていたので、平安時代のモノは一つもありません。しかし同時に、國の中心的な都市であったので、物語や文献、そしてツチの下には隠れたモノがたくさんあります。NPO平安京の活動は京都市の埋蔵文化財研究所と連携してそれらに光をあて、現代に生きる皆さんに知らせることから始めました。

京都アスニーにある平安京1000の一の模型など、会員がボランティアで説明しています。千年前の日本の人口は、現在の二十分の一ほど。ずいぶん空いていましたが平安京は、現代と同様に一極集中でした。

源氏物語千年紀

2008年(平成20年)「源氏物語



千年紀展・京都文化博物館にて

音は、現代とちよつと違っていたようです(因みに「桐」は山野に自生していない園芸種です)。



源氏物語イラスト版

語・千年紀」。ゆかりの京都・宇治・大津そして福井県武生では、さまざまな行事で賑わいました(二ニュースレター151号参照)。11月1日、千年紀委員会が宣言した「古典の日」は、2012年に法定化されました。

今年の活動

イラストレーターで知られる会員・ながた・みどりさんのねずみの光源氏「ちゅう源氏の源氏物語絵巻」を出版しました。宇治十帖まで全巻イラスト版です。

春の総会には、創作朗読劇を催しました。平安時代の日本語の発

表紙写真：盛夏っぽいタコスで満腹。(撮影 廣部出)

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所

〒600-8006 京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町99 四条SETビル2F TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所

〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所

〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所

〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-1-9 NOVEL WORK Iwamotocho 5F TEL(03)5244-5132 FAX(03)5244-5140

九州事務所

〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

滋賀営業所

〒527-0012 東近江市八日市本町9-19 SATSUKI-RO 内 TEL(090)1422-1096



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikitopaperを使用しています。